

## 湾岸諸国書店事情 —クウェート、アラブ首長国連邦、バハレーン

高橋理枝

二〇一〇年一月末～二月にかけて、資料収集の目的でクウェート、アラブ首長国連邦（以下UAE）、バハレーンを訪問した。今回はこれら三カ国の書店事情について紹介したい（個別の書店については、掘抜功二および平松亜衣子『イスラーム世界研究』第一巻二号 二〇〇七および第二巻二号 二〇〇九）の書店案内を参照されたい。なおこれらの書店案内の内容は今日では古い部分もあるため、今回の訪問をもとにアップデートしたものをアジ研図書館HPに掲載する予定である。

大学書店



まず始めに、湾岸諸国の特徴について簡単に述べておこう。三カ国とも自国民の人口規模が小さく、人口の多くを外国人労働者が占める（クウェートは約六〇%、UAE約八〇%、バハレーン約四〇%）。自国民は潤沢なオイルマネーの恩恵を様々な形で享受し、裕福な生活をしている。外国人労働者との格差は非常に大きい。問題となることはほとんどなく、チュニジアに端を発したアラブの春（二〇一一年一月～）以降も外国人労働者の状況には目を向けられていない。

湾岸諸国の書店は大きく二つに分けられる。洋書を主たる商品とするチェーン店と、アラビア語書籍を主に取り扱う小規模な書店である。代表的なチェーン店としては、Magnudy's, Jarir Bookstore, Virgin Bookstore, Al-Mutanabbi Bookshopなどが挙げられる。これらの書店はウェブサイトで充実しており、オンラインでも本を購入できる。またドバイモールには、アラブ諸国最大の売り場面積をもつ紀伊國屋ドバイ店があり、その面積は紀伊國屋の東京本店を上回る。洋書がフロアの半分以上を占めるが、日本の漫画の英語版も充実していて、湾岸諸国の王族たちはここで漫画の“大人買い”ならぬ“王族

買い”をするようだ。チェーン店ではどこでもトラベルガイドや小説、ビジネス書は揃書もある。アラビア語書籍も少数ながら販売しているが、店員がアラブ人でないことも多く、総じて資料事情に通じていない。

これに対してアラビア語書籍を扱う小規模な書店は、その存在を知ることすら難しい。ウェブサイトを開設しておらず、研究者や現地の書店を通じて情報収集するしかないためだ。通りに面した入口近くの棚には、ギフトカードやファンシー雑貨が並べられていても、奥に進むと専門書が天井から床まで壁二面埋め尽くしている、といった場合もあり、全く侮れない。店員はアラビア語話者で（大抵はエジプト人やレバノン人）、地元のアラブ人が専門書について相談している姿をみかける。湾岸諸国で出版された書籍を集めるには、こうした書店で資料収集するのが唯一の方法である。今回の訪問では、日本で全く情報を得られなかった法令集をいくつも見つけることができた。湾岸諸国で出版される本自体がかなり少なく、現地の書店でもレバノンやエジプト



紀伊國屋コーランコーナー

クウェートは、アラビア語書店が他の二カ国に比べて充実しており、地元出版物の数も最も多い。クウェートは独立後まもなくから議会制度を有し、湾岸諸国のなかでは比較的民主的と評価されている。またクウェート大学の学術的な水準も高い。そうした背景があつてか、民主主義や政治思想に関する本が多く出版されている。

バハレーンはクウェートに次いで教育制度が整備されたが、書店の数は少ない。自国民の間に階層格差があり、政治活動や出版活動も厳しく規制されていること、人口規模が非常に小さいこと（約六五万人、うち自国民人口約四〇万人）が影響しているのではないかと考えられる。バハレーンではこの出張の二カ月後

「アラブの春」の影響を受け、差別的な待遇を受けているシーア派住民を中心とした反政府デモ隊と治安部隊が激しく衝突する事態となった。ショッピングモールの一角で、様々な国の人が洋書を手に取り品定めするという光景は、他のアラブ諸国では見られない湾岸的書店の風景といえることができる。他方、客の要望に細やかに応えるアラビア語書店も健在といった印象を受けた。今後「アラブの春」が出版活動にどう影響するのか、また「アラブの春」がどのように取り上げられ現地で流通する（あるいは発禁されて流通しない）のかに、注目していきたい。

（たかはし りえ／アジア経済研究所図書館）